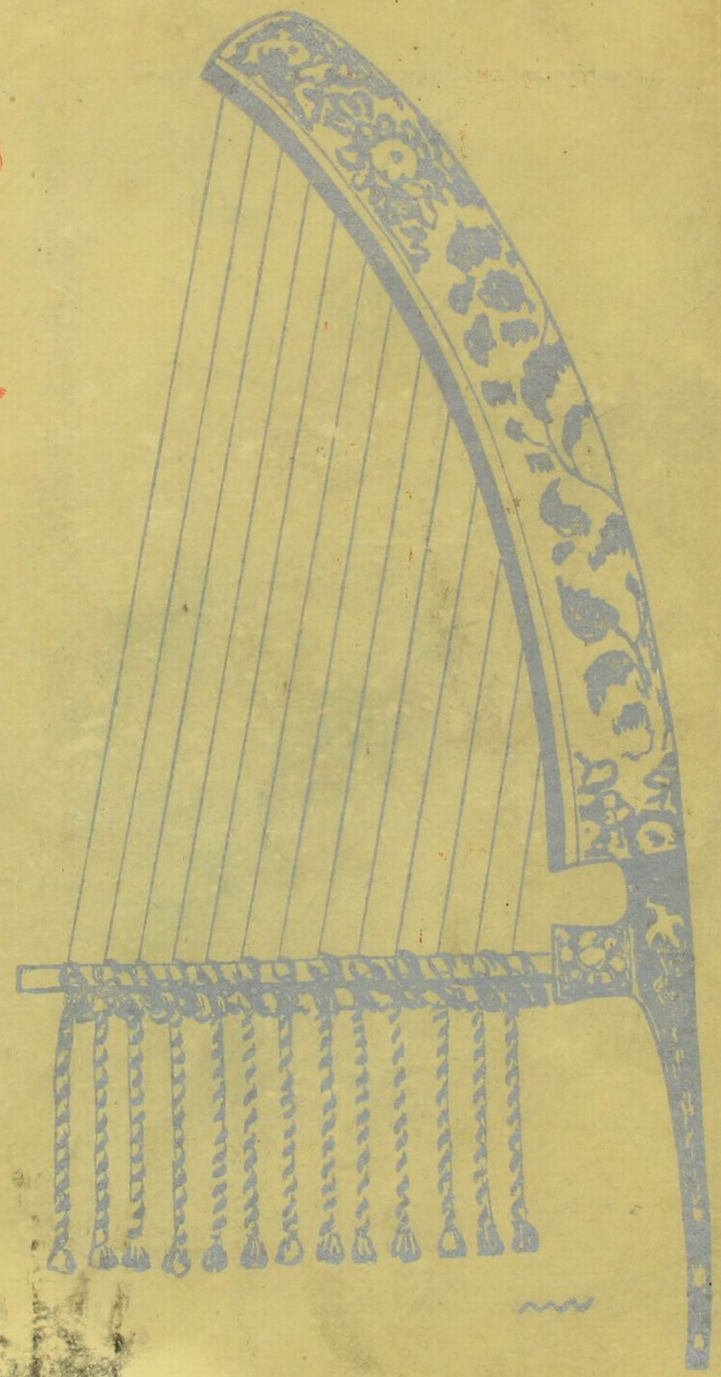
管絃



小林愛雄著

管

絃

管

絃

管絃目次

管の巻

〔一の曲〕

獨奏……一頁
追懷……四
荷馬……七
舟がよひ……一〇
花垣……一三
ささらぎ……一六
舞會の日……一九
默夜……二三
月草……二六

鐘はうつよ……二八
寂寥の譜……三〇
絃の火……三四
蜜蜂……三七
〔二の曲〕
海の愛慕……四〇
絶壁の火……四七
古跡のおとづれ……五四
海の響……六〇
寂音……六五
渚の火かげ……六九
毘沙門……七五
凄惨の影……八三

悲哀の華……八七
〔三の曲〕
落葉樹……九三
この宵雨……九五
白夜……九七
風の日……九九
暗港……一〇一
尼寺……一〇三
山間……一〇四
罪の音……一〇五
平和……一〇六
朝嵐……一〇七
亂調……一〇八

涙……一〇九
戰後……一一〇
佳き日よ……一一一
君こそは……一一三
和絃……一一三
夢……一一四
戀と四季……一一五
かへりみ……一一六
俯仰……一一七
裾さばき……一一九
白壁……一二〇
棄兒……一二一
海の日……一二三

薄月……一二三
夢ながら……一二四
わが琴……一二五
春たゝば……一二六
歸り路……一二七
少女松原……一三〇
さくらまち……一三四

絃の巻

靈鐘
上の幕　磯回の夢……一三七
下の幕　鐘塔の魔……一五一

管の巻

目次をはり

管絃（表紙畫）……長原止水
管絃（挿畫）……滿谷國四郎
靈鐘（挿畫）……梶田半古

管絃

〔一の曲〕

獨奏

白壁きらゝまだら環の
樹下の樂堂雨あがり
四月宵なり、
窓を射るゆふ月は
絃の音にゆらゆらゝ、

小林愛雄

うす衣ふるゝ細椅子の
窓に影添ふ姫ひとり。

月光に、わが音を波にして、
戀の花里雲とほき
海のあなたへ、—
狂はしきこひの曲
夢と鳴るはらはらゝ、
律のみだれを、誰かやな
たれかよ窓に伴奏の。

奇しと半蔀かゝげしが、
歩みかねたる蝸牛
たゞ月の扉に、
空わたる海鳥一羽
磯は浪ざゞんざゞ、
妙音をそらに連彈の
琴とならばと波と鳥。

追懷

日光と雨を被衣の海は
春の城白堊に生れし
南國の白鳥のうたに、
波の子も小笛をすてゝ
すや〳〵と熟睡の晝ぞ、
さながらや大野のけはひ。

あゝ冬は磯もくだけと
妖鬼が花吹く浪路、

あらぶれし鯨も立つて
舞歌にうねりを呼びつ、
わなゝけば深潮七重
海の根も搖るかとばかり。

その海の呼吸いまかすか
沈澱の春藻の靜坐、
亂樂は無言に鳴りて
わが絃は切にみだれつ
冬想ふ春のわびしさ、
見に堪へし追懷の海。

あゝ冬の落ちにし露の
また春の古りにし花に
葛の葉のかへす悲哀
かいやればはた古琴の
ひそやかに音をわきかへす
絃よわれ、平瀉の宵。

荷馬

市倉並みのぬれ壁に
身にひく車わだち深、
重げに蹄地につけて
默して白馬つながれの
亂れ尾しぼる雨の春。

鞭の痛苦の背も低く
さもうなだれの面伏に、
路芝さぐる白き息

白霧ともまよふ、街はづれ、
雨はうつ〳〵春の宵。

『その日雨なりき、驀地、
大海越えの涙と嘶き、
焔の陣に馳せしとき、
鹿毛もうたれぬ』――世は寂びの
鐘に白馬は夢や追ふ。

この時小砂利市に賣り
巷かへりの空荷引、

栗毛は過ぐる、路傍を、
刹那、ふと見る、白馬は
わが野育ちの愛のなか。

飛ぶに、轅は身の幽囚、
嘶けば、白馬も高嘶くに、
馬子はえいやと鞭ひとつ、
うす鬣に雨しとゝ
春はくれゆく白馬の背に。

舟がよひ

舟は出づ、秋の江に。
江はあきの三春秋まへ、
悲愁を別ちてし
舟の水棹の軋る音の、
水車に消ゆるこゝわたり、
別離の人の頰のふれに
唇にかみしよ熱き露、
雁わたる森かげに、
舟も入る、森かげに。

舟はゆく、野路を見て。
歡樂をわかちてし
野末なる茶屋もみゆ、
鳥の背に駕る身とばかり、
永遠の春追ふゆきかひの
朝野の想ひこゝわたり、
三年荻の葉なはそよぐ、
驛馬かやいなゝくに、
舟は入る、草かげに。

舟はいづ、花かげに。

遠見ゆる丘の上の
小窓こそ愛の家、
何してまさむ窓のうち、
何語らはむ扉に逢ひて、
おもひは流るみだれ棹、
棹は一押砂ちかく
薔薇の岸舟つきぬ、
舟つきぬ、花かげに。

花垣

宵小路、そといでぬ。
見ゆる築地は、
蔦を冠りの月草の
しのびやか、
袖夕顔の合歡木と
唄へり、宵の夢の香を、
こゝも歡會のひゞきかや、
夕とて、
うすれゆく花垣に、

あれ、虫が鳴く。

そといでぬ、いまひとり。
築地のうらに、
小笹を蓑に木犀は、
ひそひそと、
あまき香ふくみ秋海棠に
うつすとみてや、慕ひより
こゝも愛想の糸を繰る、
夕とて、
うすれゆく花垣に、

あれ蜘蛛の子が。

寄るほどに、月さしぬ。
築地のくづれ、
花虹の帶遠卷に、
しめやかに、
虫にあはする唄の主、
風にもまれて美し音は、
ふたつの胸を夢ながら、
夕月の
雲に入る、花垣に、
あれ、露が散る。

ささらぎ

一月、醉に酒宴する
丹塗の家はかたふきつ、
はやもきさらぎ、小鼠の
霜の扉に倚りうかゞふよ。

あれ、小鼠は忍び足、
白梅づたひ壁うらに
瞳子寂しくより添ひぬ、
如月いまはあけにけり。

足音もたてず小鼠は、
音絶えの家の酒壺に
香もなき酒をくみつゝも、
盃かはす二十八。

たゞ昏々と小鼠の、
飈々鳴れる風の扉に
冷えの身横に假睡みぬ、
うちに如月すぎにけり。

折よ、方舞のけはひして

すゞろ近づく三月の譜に、
小鼠あはれ潦
消えたつごとく逃げてゆく。

舞會の日

一

幕あがる『關の扉』、
古りし日、夢の春の想、
こゝの憂念を空にして
研する天樂、
舞ぶりも、あれ、あざやかに
懸想がたりのうつゝもな、
殿も笑み、姫もよ、
見るに關守また笑みつ、

みるに滿坐の醉ふらしき
うちにもよ君が頰、
紅潮ながる無憂樹下の
水の眸に、さとこなた
見らるゝに、耻かし、
われは狂はし、ひそやかに
ありし夜、磯の一皷
忍び音に追ひつゝ
この青醒に、ふと君と
面をあはさで、ゆるせや、
幕閉ぢぬ、默しぬ。

二

幕あがる、『連獅子』、
花環のゆれか、髪振りの
うづまく白の潮の香に、
みだるゝよ花かげ、
めぐる牡丹の緋の燃えに
炎と狂ふ彩雲や、
空に、あれ、湧くごと、
やんれ舞樂の酣に
歌三昧の野もせ舞、
立ちまろぶ裸形の

海澎湃の連獅子を
見ては、君頬を珊瑚染、
あか〳〵とわれもよ、
いまぞきらゝか戀の里、
花降る丘の子といまぞ
たはむれて宵歌、
出語り絃も聲も張り
唄ふとみしに、はやもよ、
幕閉ぢぬ、默しぬ。

默夜

月の皇后の美しさは、
臥ぬ夜の泉に淨く浮く
靜夜のおもひ！
晝の聲に病みし花
音もたてず落ちしか。

森、新皇子の綠衣は、
みだれず地に燭おとす
靜夜のこゝろ！

宵の音に倦みし鐘
波とほにゆきしか。

皐月、湖みる石に居て、
沈めるけはひさぐりしに
默夜のひゞき！
死にかへるこゝろをば
つゝみえで叫びしか。

あゝ、湖底の寂寞は、
想ひつきせぬ高鳴りの

魔樂のひゞき！
響かせて花ふらし
鐘音を沈めしか。

月草

うらかへる楯をふまへ
かさこそ野狐、
血に錆びし朱鞘を蹴つて
かつ〳〵魔皷、
乳迷ひの鹿の子とらへ
むざ〳〵嚙みたり、
戰のはてし夜。

城跡の夜の秋、

凄慘得堪へず、
月色に春日わすれて、
わな〳〵月草
草丘に咲きしよりぞ、
夜な〳〵つき草
寂しらにさくかな。

鐘はうつよ

會ふ夜の燈、川に落ちて
日くれはてし野路の橋、
鐘もうつよ、法會を
かへさの尼がおもひ。

足音秘めどわが頰照りつ、
沈默し居れど胸はかたる、
鐘はうつよ、うつよ鐘の
まどはしき尼が、今宵。

うなだれて橋の欄、
裳裾にゆるゝ罌粟のこぼれ、
滅亡の歌か、ひく空に
法に泣く鐘長う。

野越の夕闇たどり
たどりゆくさびしさを、
鐘ひとつ水に落ちて
露をふむ、物のけはひ。

寂寥の譜

『騒擾』の『夏』はをのゝき
青白き火の香や、
湧きのぼる白霧
樹の間よりむら〳〵
虚空を塞げば、
海鳥に似し雲吹いて
秋の氣をちぎりつゝ、
みなぎらす朝嵐
さび音にふけば。—

死鳩の和毛も
涙だゝぬはつ秋
あはたゞし過ぎ去り、
いま靜寂をひとゝせの
晩歌にたけし秋の森、
椎の葉音のさゞめきに、
石彫の大獅子の
名殘の夢をさましつゝ
あらはれし樂童や。
黄葉の森門たゝき

うなだるゝ山姫に
『物申す小童、
天の戸は秋の音
たかひゞく合唱の
樂の坐もわるゝに、
下界禮讃聲もわかず、
くらき荒磯の冬に似て
興もなや刹那の。』

山姫は『さらばなり、
野分たつ朝より

わな〳〵と小指の
琴の柱にふるゝよ、
晩秋なればかなしみ
角笛にあはさむ。』
いふほどか、『寂寥』は
夕べ〳〵にしめやかに
落葉の門をわけてゆく。

絃の火

はやも日本軍大連にせまれり。冬寒の夜なり。忽ち露人の家は占められぬ。家具は焼かれぬ。なかにいづこの樂姫がその昔いだきし琴か炎々たる火焔にこめられ了んぬ。

うす衣ふるゝ擁琴の
哀音せちにひたゝと、
わくよ、潮路の
夜樂の波に、
宵卯の花のこぼれ香や、
雲や、樂會の衆のせて

ゆくよ、江の郷、
漁歌の舟に、
絃は浮き浮く舞ひ鳥の
あまき渚の戀がたり、
姫は絃の火
燃えてや紅かき。

一夜砲烟夢を射て
樂姫朔北へひた走り、
はやも樂堂
陣鼓のこゑに、

卒はこめたり、冬寒に
主將の下知と篝の火、
火にぞ投げたる
擁琴の幽囚。
にがき悲恨の追懷に
哀歌の響まどはしく、
擁琴はむら〳〵
火炎とあがる。

蜜蜂

うすもの被衣靄のうちに
紫雲の帶は千襞積に
夜の戸たゝく朝姫、
響に蜂の瞼あきて
あかき玉環の朝はあけぬ。

されば死の室夜は亡せて
日影も長にはろやかに
間廣の空はうたに溶け

小蜂は芝をすぢかひに
ゆきにもどりに唄さはに。

あまき眞夏の白日路に
彩野うつゝの花戀の
たゝわれとなき接吻に、
天上こゝにうまし世と
讃歌湧きわく花の坐よ。

蕋は炎の舌に燃え
もえてはうまき蜜の香の

群集の蜂のあふれ笑、
虫おどろかす管絃の
音ともこりてや眞晝丘。

照る日に丘は束の間を
永遠の世といまうたよぶに
垂死の花もあふれ笑み
笑むに招くに一の列
さらばと蜂はまた花に。

〔三の曲〕

海の愛慕

→旺洋の巻←

男うたふ

荒磯をいでゝ夕凪、
雲を衝く孤舟の
大洋の落日！
赫々と空燃えて
雲のへり金色の
箭は照りわたる磯島や、

聖者去りゆく日にも似て
あゝしづかおごそかの
尊かき音の平和、
肉は融けて靈ひとり
靈ひとり永劫に、
ものとは知らぬ物象の
身に泌みて心絃に觸る
哀樂のほかの音。

女うたふ

渚うつ夕潮に
あくがれし海の香や、

はてなの涙を追ふ舟の
潮路とほくうかびては、
露臺のおばしまに
春の夜の琴の音
ありし世をまのあたり。
胸をうつ潮の音を
夕梵ときゝたがひ、
艪に落つる露をみて
夕顔をおもひやり、
胸に秘めたるつり鐘は
寂しき音をみだれうつ

あやしきはこのこゝろ。

男うたふ

龍門うづまく波こそ
きほひある高鳴り、
王者も、あれ〳〵、
みてあればおもしろや
高樓もくづれぬと、
響にしるきうき沈み、
人生のえにしも時代の才人も
こめてや波は磯のべに
夜すがらの遠鳴りは

いまも太古の歌拍子、
調べさぐればおぎろなき
戀と藝術の永遠の香を
磯姫はかたらむ。

女うたふ

その姫のよきさとの
ふか海の樂の音、
二絃のいとうちて
ひとつの和音はなるといふ
またゝくま合はす音の
うたに知るこゝろは

あゝ永遠の生命か、
哀愁の夢去れば
ときのまなれや雲井より
新星に似し花ふりて
御使くだるまばゆさに、
誰あらうあかき頰の
くちつけを惜しむもの。

合唱

あゝちればこそ、
あゝちればこそ花ならば
うつろひ荒れよ戀の海、

あゝ卯月こそ、
あゝ卯月こそ春ならば
日くるゝまでも花つまむ、
この世わするゝふた枝に
すゞなる眞珠戀のいろ、
さればこそけふの船路
さらばこそわたり鳥
海をしたはむ。

絶壁の火

磯のほとりの若き海夫、波と白き蜑女を戀ひ、崖上に火をあげては、歡會の宵ぞと蜑女に知らせぬ。ある冬の夜火をみて蜑女うれしと待てど、せのきみ來らず。雪は亂れ飛んで止まず、遂にこのをと女を埋めたり。戀をわたるため人があげたる火とは、知らで消えにし蜑女あはれよ。

白班の鷹も玄冥なに
雲を嚙む磯の夜、
夜もふけて小濱の
蒼壁の巖根に、

火をたいて海男の
胸のゆらぎをうつす宵。
松とほきみさきの
一つ家の蜑の女、
忍び出る歡念の
うつゝなの懸想や。

けふもはや日暮れて
黄昏の海の香、
淵の火かげを今かや
いまか、いまかと松原

往來する渚を
うつ涙のみだれや、
漁り船えいさの
聲もきえて千鳥の
忍び音をかぎりに
夜更けたり巖かげ。

折からや『あれ見よ、
火影なり、火かげなり』
云ひつゝも朱唇に
たゝへたる微笑こそ、

酒甕より湧きわく
高潮の戀の譜
胸絃にむせびて
おぼえずも涙を
はら〳〵と岩の上、
見るがうちに火消えつ。

火あがりし巖を見て
堪へがたき追懷や、
すぎし夜は夢に似て
またゆめのゆふ潮

その潮に舟のり
海ゆく日あらばや、
われも櫓をあやつりて
平和みつる海の上と
待こゝろすさむに、
降り來しは雪なり。

あかき頰はもゆるに
胸の熠は渴けるに
雪ふるよ、『ふれ雪、
とまれ、君いづこにか

宵暗にまどへる』
暗黑を衝く寒潮の
人どほくくだけつつ、
雪は夜と深くして
茫杳と地は沈む。
幽寂の海の音。

白羽のふか夜の
つめたくも夜あけぬ、
戀をねたみて火を炬きし
漁師の來てみれば、

刄のごとき白岩に
ゆら〳〵と雄松の
わかき身をいだきつ
蜑の女はとだえて
白衣に照り榮ゆ
くろ髪の氷柱や。

古跡のおとづれ

西の國人が旅日記にはむれつとが古跡を記せるを見、忍ぶに堪へでこの一篇。

北海の磯つゞき、鞳鞳と浪の音や、
むれたつ白鴉しぶきに消えて、
また鐘樓にかくれたり、淋しやな、
えるしのあの城、渚に立てる。

こゝなり、城樓のわたり、
ほの白き月前、警護の衛士、

あれ先帝の亡靈よなと、
哀鐘皇子*の胸をうちし。

今はとみれば、さうんどの海、
藍にしばなく夕潮の
沈む巖にくだけつゝ、
御宴のむしろ、雲客の
君ほぎのうた、さながらに。

感懷つきせぬ城塔や、
后の宮**は幽閉の、

御簾もさゝぬ小窓より、
ゆふべ海ゆく雁がねに、
くづれし人の世のえにし。

渡殿すぎてをぐらき間、
守衛の屯、壁衣に、
あなと魂消る聲ひゞき、
『母上、これなる御像は』と、
皇子が苦諫の血のわだち。
仰げばや、入日は落ちて、

ろ、をゝま古殿の夕雲の
白堊のくづれ蔦にもえ、
消えてゆく七丘の
まりえんりゝすとの森のなか。

旅館の火の香かすかに、
夢より沈む樹の間、
大埋石の御墓は
孤寂の世經しみこがやど、
うつゝなの境界や。

小笹ゆく水、丘をめぐり、
葉がれうせし小柳の
木蔭！とみればほのめく白衣、
花束の露ちり、
はら〳〵とくろ髪。

にはかに高音みだるゝは
『君はうせし、哀れ、
頭に芝、哀れ、
君は逝きしか』聲もちぎれ、
ちぎれて落つる一葉は、

おゝいりゝや入りし泉に。

＊はゝむゝれゝつゝと
＊＊丁抹王きゝりゝすゝと二世の后

海の響

頰もあか〳〵と琉璃の海や
戀しりそむる夕輝に
銀櫛かゝる小原が丘
夢とあはさ、夢よりも。

遠つ海は藍に溶けて
白き舞踏、渚むれぬ、
樹の間にゆるゝ腕ひくう
水泡としろさ、泡よりも。

（折しもはるか海の響
誰そ獨唱の波にのりて）

『戀は海の呼吸をふるひ
磯も碎けと海角にあたる
われはその戀、
破れては天空を地獄に
あゝ、奇しき終焉かな』

（折しもまたも海の響
誰そ獨唱の雲にのりて）

『戀は光明、暗黑を照らし
生ける花を胸にさゝぐ
われはその戀、
美しさは、地獄を天空に
あゝ、奇しき生命よ』

覺はれ燕春を鳴いて
歡樂を哀歌に誦むと、
ひとりは戀の終焉を夢み
地獄の痛苦、地獄よりも。

純白の羊草苑の花に
接吻を永久に與ると
ひとりは戀の生命夢み
天空とほがら、天空よりも。

(折しもかなた海の響
誰そや合唱の雲の浪に)

『戀は夢よ、覺むるならひ、
さはれとはに追懷の
われはその夢、

よし戀人は亡せぬとも
戀の夢追ひゆかむ、
よし、海は天空となれ、
たゝ夢を、たゝ夢を』。

寂音

深海沈む夜の秋や、
秋は樹ぶかに藍を溶く
月光の草逕！
葉陰洩る森の香を
身に浴びて若き女の、
草ふむもそことなく。

かげ瓔珞の森苑や、
飄遊びとのみだれ音に

たゆたふ哀歌！
音は遠にはた遠に、
はて消えぬ、若き女は、
花牀のまどろみに。

聞けば、管鳴る、舞の音に、
天降りし、見れば、嫦娥の
天の私語、
『月里の寂寞に
人の頬の美しさに、
地を忍び忍び來ぬ』。

雲井の秋を長想の
佗の少女は、はやりかに
わなゝく高音—
『たかき界のまどかさに、
靈郷の清淨さに、
天馳けむわが願。』

『理想は海波の琴に駕り
八重潮はてな雲と行く
これやこの戀』—
誰が聲か胸を衝く、

時しもや嫦娥消えて、
あまき香の薫するに。

栗殻色の髪浮くがごと、
長夜の寂のひたゝと
潮たゆたひ——
夢さめぬ、月落ちぬ、
婆娑と鳴る破壊の葉の
森わたる風暗き。

渚の火かげ

入日葬ふ鐘鳴り
水碧き港の
鷗もうたをやめて
壺巣にかへる夕、
砂しろき渚の
漁家もさむき窓に
うす火かげ誰をまつ
うちに人のけはひか、
みるまに障子あきて

宿の妻沖みれば。

暮煙風にゆれて
ゆれてくる黒かげ、
『船ならば！わが郎
もしや、あの、わがひと』
近づくは大船！
十字の旗に知れて
負傷おふ兵のれる？
沈々たり海の夜、
入船は碇なげぬ、

漁家いづる人かげ。

我郎愛でし薔薇の
白き花野に折り
船ゆけば、病客
秋の床寂しくも
白布に身を巻かれ、
石のごと面伏に
のべし手—みれば—(げにこそ我郎)
わなゝく唇切にかみて
聲なく『わがつま』

しづかによべば。

あゝ刹那のこゝろ、
黄泉のかどでになほ冥朦く
光明と暗黑をひとゝきに
やせしおもわ仰げば、
眩惑へりや、眸の
我郎ならぬひと！
『は』とばかりたぢろぎ
聲もなく默して
ひそやかに泣きたる

佗人のかみしみ。

あてもなき希望の
ふつに斷つ小絲に
繫がれし運命や、
はら〳〵としら露
含みたる薔薇を、
いまはとてしづかに
枕邊にさゝげつ、
色褪せしうす衣
夕寒く船をいづ、

船をうつ波の音、
わが宿の火かげや。

昆沙門

上

市街の塵に世をわび
飯鉢並におかれて
古瓶にさせる拐抄と
怒相見はる磐若と
巷にらみ昆沙門、さて
苦行五年日陰の
寂のまちの店頭。

もとは匠人幾夜の
靈に彫りし昆沙門、
違棚に布定と
燭に乘じ聞きしよ
女人琴の次の間、そも
音の春はみぢかや。
道具商に賣られつ。

娘掃除の宵朝
はたきとるも重たげ、
磐若面にかぶせて

鉢に入れて柄杓を
持たせみては『姿の、ほゝ
や、可笑しやな、昆沙門、
たそや來ても見ませな。』

さても奇特や、老人、
とぼ〳〵宵眼鏡に
頭撫して昆沙門
あー昆沙門とあがめて、
そゞろありき五年振
深夜、歸る床の門、おや、

足がとれまろびぬ。

起居ならずひと夜は
軸の龜に禮拜、
手力うせ身塞へぬ
夜あけ起きて、老人、
大音聲、南無三、かつ
商人は、昆沙門、
續飯もてつけしか。

下

かくてまたも床間いで
戸棚しばし暗住み、
さすが老者捨てかね
街のはての野末に
昆沙門堂築きぬ、それ、
板圍ひ冬寒、
詣でくる人なき。

時に戰亂地に湧き
商人召さる血の宮、
店にかゝる劒を

とりていでぬ、夕を
娘泣きぬ夕を。あゝ、
古瓶や磐若、飯鉢、
すゝに寂ぶる店頭。

春は沈み、雨滴
石に騒く折かや、
とゞろ門に俥の
眼しひ足なへ商人
のせて來たる、娘の『こは
などてかく』とくづほれ

祈りしよ、昆沙門。
その日堂にをろがむ
娘、心こめてや、
祈願苦行切なに
あした宵をけぢめ無。
『おゝ、いたいけ、歸依すや、さば
慈悲をぞ』と昆沙門、
靈驗あらた、あらたに。

商人やがて靈妙や、
明き目足立のすこやか、

娘踊り唄ひつ、
その日よりぞ昆沙門、
群集しきりかしは手
法苑の花より
わく露を汲みける。

凄惨のかげ

（一九〇五年九月五日）

日の眼にゐるき逸樂の
あかるみ通る銀の矢も、
黄昏時のまじろぎに
盡きぬと、みたる魔神ばら、
空を射る雲の坐も
亂れつゝくろ影。
黑かげは市街へ

勢威猛たばしる、
浪もなだれの聲ひそめ、
嵐も海に戸まどひの
大地ゆすぶる魔神ばら、
『乾ける骨に生命あれ！
生命あれや』とゞよめくに
冷えの眞青の白骨の
血を湧きかへす朝雨や、
離れし水泡いだきより
靈と肉こだまして

ッと、起ちし、將卒。
血にあきし寂野に
忍び音のこりてや
戞々鳴り鳴る魔樂に
反響海ゆく日本海
海波ゆらめくまたゝくま
群靈こりぬ、東京の秋。
沙漠の街と落月の
暗に死したる靜の府を

叩くと見えし群靈の
亂音凝つて火を呼べば
巷射る火雨に
ほどばしる血烟。

血けむりのむせびに
復活へる靈の火
火を呼ぶ威力石を溶く
炎の星は紅舌に
きほへる虹の凄慘の
あゝ影、戰後榮光の國。

悲哀の華

杳渺にどよむ御車駕
五彩の雲に駕して、
宮殿を出づる駒の嘶き
警護の鶯歌もかろく、
玄冥の行幸春の日や、
うつや皷の慕はしや、
女神ほの〳〵袖振りて
冷えし地の世に着きたまふ。

あれ、照妙の御袖の香
こぼるゝいまか、今を春方と
野はをちかたの繪巻物、
萠木は綠のにひじほに
水枝は紅の虹の欄、
花は千襲禎の衣織りて
まばゆきわが世朝の國。

春酣の丘陵のはてに
そむきて獨奏の聲も微か、
悲哀の曲調こめて誦する

なやむ風情や悲哀華、
花瓣に『あはれ』の文字とめて
花は紫深く染むる。

わかき俤すゞしく笑むも
妙なる瞳まがきとはず、
あけぼのや雲のたゆたひ、
たそがれや羊ゆきかひ、
慈母自然の乳房にいねて
一世は永遠の野に入る身。

希臘の人既に歌へる
胸の血しほは蓋に秘めて、
うらゝ白露こぼるゝ蕚
緑のわが手細きをのべて、
燃ゆる情感は聲なき詩に
いためる胸の絃にかよへど。

春撩亂の花の宴に
合唱のむせぶ響、
それよ夢か樂の響、
あれよ現か琥珀の光、

羅綾のきぬに榮光きほふ
揚家の少女うつゝなに
追へるはあはき春の興。

ほこりの花を世人は愛でゝ
陽台夢客姿に醉ふか、
誰かしる尊かき歡喜は
胸にあふるゝ悲哀の湖、
その水汲みて草も生ふ
深愁こそ生命よ歌よ。

轅といめぬ夏雲に
はや夜嵐の春のかげ、
花もかすみもとく過ぎて
便なきわが世をうらむは誰かや、
こゝゆく水の野邊の小草、
わが世によする同情ふかくも
熱き涙の露をたゝへ、
悲哀の調いまにたかく
無聲のうたに今日も花咲く。

（一九〇四年五月作）

〔三の曲〕

落葉樹

凋落重き秋の氣の
緑の城にせまる日や、
夏の葉老の靜寂の
光榮みつる萬葉は、
みな落日の黄を浴びて
靈の翼の音もまどか、
海に破船の大城や
八重潮ふかく落つるごと、

はた革命の火の燃るに
塔のくづれを目のあたり、
威ある廢亡の跡追ひて
命運の墓にうもれゆく、
聖堂めぐる落葉樹
恐怖も知らずはたく〳〵と、
葉ごと〳〵の法樂に
沙門遷化の尊かき宵。

この宵雨

降る〳〵雨は新酒の
いとも醉ひたり、崖下の
洞穴谷々。
ひと宵に秋の實の
まろび落ち落ちしかな。
明朝村わたる川岸の
黑髪を溶く襟もとに
ながれよる實や、

奇しき香のさゝやきに
戀の芽は生ふらしき。

白夜

空に戰慄の凍え身に、
急行の旅人、白被衣、
雲はせつせと、
南國へ、道すがら、
水淺黄、月は照る。

雪のたまりを冷えの地は、
知らで熟睡の夜は更けて、
氣のひつそりと、
舊街の石だゝみ、
圓頂へ白を射る。

風の日

小徑の日光は
ゆら〳〵環形、
雲垣くづれて
ふわ〳〵舞形、
草の葉はびろうどの
逆撫でに、
水の音は巣をいそぐ

鳥のやう、
銀杏葉ちぎれて
みる〳〵裸形、
秋の日野を射る
きら〳〵魔形。

暗港

光の糸をめぐる環に
港はひく〻海抱く
水に深夜のかげ落ちて
潮流はせまる角笛の。

船には出帆をまちわびて
水夫は綱を鳴軋の
別離の夢もなりがてに
甲板は動く提灯の。

丘にたつ人は伏見の
見つむれど黒影ばかり、
せめて明日暴風ともなれと、
弱き身の波立つおもひ。

静かにも夜はふけてゆく、
古りし日の愛音低く
遠き音の息ひをまたず
あゝ丘よ涙はうごく。

尼寺

わたつみの底に似し
僧院もふかき夜に
忍び音の比丘尼や、
その夜より讀經の
たえしまゝ秋もゆく、
煤けたる如來や。

山間

あらくれし巖男の
なかをゆく河姫
よき顔をさらせば
やらじとて大岩、
せまられて河姫、
紅き頬のうしほに
のがれては流るゝ。

罪の音

そゞろ夜の物狂ひ
えたへじと指觸るゝ
わが琴のおそはれ
いみじ音に波うつ、
過ぎし日の罪なくば
かばかりの音はいでし。

平和

ながき暗黑、恐怖の
平和ところも更、
よろこびの泉は
わが靈魂をながれて、
ながれてぞ藝術の
光ある花苑に。

朝嵐

朝まだき母戸に
ざゝんざと暴風雨、
鳴神が憤怒の
形相はすさびて、
日輪をいどみつ
陣營の獅子狂ひ、
またゝくま日出でゝ
平和はなりたれど
あらぶれし野すがた。

亂調

水の音に興えて
秋の夜の河船、
ゆるき櫓にふくまるゝ
君が手の白露の
落ちてより、亂れたり
みだれたる船唄や。

涙

涙とは何かや、
神に似し失意の
深淵なる胸いで
まなこにぞ湧きわく、
みのりある秋野に
すぎし世を思へば。

戰後

さむ潮のからふと
こるさこふ砲火に
さびたりや燒跡、
漁人もなき磯邊に
なほまもるあはれや、
痩犬の海を見て。

佳き日よ

ゆくなかれ佳き日よ、
照る野みち葡萄の
あかければ榮光あれ、
ゆくなかれ佳き日よ、
照りはゆるをと女の
頰の紅のあかければ。

君こそは

夏の日かそれよりも
らうたきにきほひあり、
夏の日はかゞやきの
あまりにもつよくして
時よれば雲もよひ、
君こそは常夏の
萬象はみな活きて
終焉をこそえしらね。

和絃

など樂の音のかなしとて
哀しきうたを愛でたまふ、
きかずや絃も絃を戀ひ
やはき響の音にたちて
白露ふくむ秋の夜に
吟ずる虫の琴たるを。

夢

夢ながら夢と知る
君を見て君あらず、
遠音にはこだまとも
沈默にも樂の音と
うつゝにぞおもひしが。

戀と四季

春の夜や會ひみての、
そむきては冬の夜や、
さらば夏また會へば、
やがて來む稔る秋。

かへりみ

窓の火かげも螢火の、
峠つきればあやなし暗の、
さびし山路は聲もなく、
わかれてゆくかあのの如く。

俯仰

姉君天上のころよめる

白花落ちて樂もなき
寂寞こむる地の色よ、
とづるか雲に、
とはに見る憂きかけの
荒ましきその夜しも。

淨樂の宮花降りて
紫雲映り榮ふ月苑に、
秘曲のこゑは、
春空にこだまして
諸鳥の永遠の歌。

裾さばき

裾さばき
石段あたり、
もしもやと
窓開け見れば
はや肩に君。

白壁

衣ゆれし
かげの白壁、
後の日も
甘き香吐くらし
唇つけてみむ。

棄兒

胸さわぎ
尼は扉推しぬ、
月あかり
子あり、抱くに
乳はなき身の。

海の日

海の日よ、
管樂すなる
春の扉を
たゝく鷗や、
君おもひいでぬ。

薄月

うす月に
君を送りて、
かへり路の
月草ひとり、
瓶に見る宵。

夢ながら

夢ながら、
君門に立つ
夕月夜、
かへらぬひとゝ
また思ひけり。

わが琴

わが琴も
觸るゝ手待たむ
秋の夜に、
おのづと切れし
絃のありけり。

春立たば

春立たば
また君來ませ、
歌誦みて、
湖のあけぼの
船こぎゆかむ。

かへり路

見やれ落日に松原染まる、
松に隱れる磯の家、
それ、取舵、よいかな、
よいかな、取舵。

見やれ白い帶渚は光る、
赤の襷がはや見たい、
それ、取舵、よいかな、
よいかな、取舵。

見やれあれあの小濱の岩が、
岩のうしろは磯の家、
それ、取舵、よいかな、
よいかな、取舵。

見やれ磯家は船首に動く、
窓に井桁の袖が散る、
それ、重舵、よいかな、
よいかな、重舵、

見やれ舳にあ小鯛が踊る。

をどる小鯛は誰にやろ、
それ、重舵、よいかな、
よいかな、重舵。

見やれ娘が岩に出て招く、
呼吸が切れよが一思ひ、
それ、重舵、よいかな、
よいかな、重舵。

少女松原

（長唄にとてものせる）

こゝは海邊の松原や、まだ曉千鳥ねざめがほ、遠近つゝむ夜の戸張、冲雲を嚙む大洋の、涙の調もかすかにて、森沈たる太古のさま、霞は涙をさりかぬる空混沌の天地に、何處ともなく現はれしは、たゞ眼も榮ゆる若人、ひだりにうつゝ右に夢、わが身ありともしら雲の、たえまに洩らす憂き想ひの、末は小舟の海の底、何におもひ狂ふぞ、こぼれては

かへらぬ露の、つゆの身を、折からこなたさしてくる、可憐の少女、姿も袖の香にゆれて、白衣の裾もいとかろがろ、（こゝなる若人これに坐しゝか、妾も行く雲を追ふ身なり、いで共に舞はゞやとあれば、聲もほがらの胸の紘、精靈結ばす神力の、一念こりては岩をも溶く、むすぼゝれたる憂愁の、雲は磯うつ涙とくだけ、（これは思はぬ現世の響、これや蓬萊の曲に聞く、今きゝそめし戀の譜に、わが新生の永遠なれや—と手をとりめぐる四つの袖に、つゝむにあまる香に醉うて、夢

をうつゝの蝶の舞、狂ふも無垢のはつ姿、ひらりひらり、くるりくるり、ひらひらひらり、くるくるくるり、快樂はてしもあら波の海路わたると覺えしが、にはかにこむる朝霧の、袖も袂もつゝみけむ、姿は雲の行方にて、妙の調の舞唄は、たゞ松風のにほひなり折しも櫓をやるいさり舟、影はみる〳〵陸指して、ほの〳〵白きしのゝめに、ひんがし雲はちぎれつゝ、あけゆく光滿々と、まばゆき彩華かへる波、やがてえんやと引揚舟、渚に起ちし漁夫の子は、驚き呼ぶも理りや、こゝ

一帶の松原に、今まで知らぬ二本松、雌松雄松の枝かはして、常磐堅磐の末ひろく、緑もふかき緣の色、その名も少女松原と、うたはれて謠はれて、化身の松はのこれども殘れども、げにみちかきは曙、あゝ束の間のあけぼの。

（常陸國少女松原の傳說に依る）

櫻町

（長唄にとてものせる）

今年南殿の春いかに、左近の櫻を殿上に、御宴のなかば早散らふ、榮華の興の束の間や。想へば過ぎし宵のころ、落花の行衛追ふとみて、さめし人世の夢がたり、戀もすゞろにうれたさの、わが世と知りし月の前、さらば と内裏忍び出で、靜寂の雲わけて、こもり居の山家の、常樂我淨の歸依の身は、たもともかろき舞衣や、鈴音みなぎる山彦の、地を吹

き返へす櫻狩、さくら狩に出でたまへば、「あれあれ咲きしばかりの花、ちらりちる花、ちる花の、こはまた淡き春の色、花吹雪、霞をこめて一團の春の行方もあはたゞし。つくづくと納言の卿、空ゆく雲に慈悲なや、樂土の興もかくてやと、せまる悲哀にかきくれて、聲をひそめて祈り言、身は山ふかきみ芳野の、聖坐にちかき里なれば、花の生命をいましばし、しばしが程と、念じつ見あぐる納言のおどろき、あれみよ花房ちらばこそ、枝に小枝に際涯もみぬ、錦張もふかき白雲の、三

七日の花ざかり、げにも靈妙や、あらたふと
の慈悲の花や。

紘の巻

靈鐘

登場人物

旅の僧・妙海……高音の部
猟人の女・花江……最高音の部
花江の父・磯秋……低音の部
主僧・一人……低音の部
寺僧・二人……高音部及低音部
天使・數人……最高音の部

靈鐘

（二幕の歌劇）

上の幕　磯回の夢

長閑なる管絃の調子守歌めいたる旋律もあれば、また漁歌を聞く想ひある序樂暫らくにて、靜かに幕あがる。舞臺の上手には深山へかゝれる洞門聳えまた爛熟たる櫻樹の枝下れり。洞門の傍には異樣なる大巖小岩、下手へかけておぼろなる海の遠見、凡て遲々たる春光眞晝を染めたる風色、猶はるか雲煙の裡島影うかべり。正面の平岩には髮を風に飜へしてひとりの美女、花江やすゝと眠れる體。開幕、數人の天使花環を携へつゝ上手下手より

あらはれいで、女をめぐりて舞ふ、双蝶また飛びまがふ、

天使合唱

春よこゝに、
眞晝まごかの、夢の香、
海としづかに、
身は海鳥の榮光を負ひ、
小躍りの終日に。
折から低調の鐘の音潮の逼る如く響く、双蝶消え
天使抱ける花環を落す。
あれ何ぞ、あれ遠潮？
海の訝か、

さても不審し、山に鳴るよ、
あな恐ろし、
いで沖島の離磯に、
春追はむ、さらば！
この時器樂の變調やゝ急、落花撩亂しきりなるに、
天使島を指して飛び去る、花江眼を開き怪しむこなし。

花江獨唱

さても奇しの夢をみしかな。
何の響か、天の子を、
奪ひ去れるよ。
落花を見て驚く。

樂座女聲二部合唱

夢の間に花も散りしか、
あわたゞし春も暮れゆく。

花江獨唱

おゝ春やいづこに。

此時花江の父磯秋、獵夫の裝にて洞門のうちより出で來る。花江唱ひつゞく。

おゝ父上か、いまの妖音、
なにの音ぞ。

磯秋獨唱

なにぞ音の鳴りしとや、
森の溜息水に溶け、

海の呟やき老の音を、
語るばかりぞ、
他に音の得こそ聞えね、

花江獨唱

さては身の夢魔か、
かつて覺えぬ奇しき想。

磯秋獨唱

若きにばかりひゞく音の、
何の命運を告ぐる音か。
遠島出でゝ海の獵、
かの夜嵐の大浪に、

逐はれずばこの磯曲ぐさ、
遠流のかげを逃れけむ、
さてもこの吾子前途思へばー

不安なる器樂の調一しきり、忽然春鳥の聲きこゆ。

磯秋唄ひ續く。

ほろゝ鳴くは雉子か、
よしなきことをわづらひぬ、
いざ山の獵、暮るゝまで。

磯秋花江聯唱

遠矢の獲物なにならむ。

磯秋上手へ退場、花江見送る體、終つて沖島の方を向き無念の思ひ入れしぐさあり。この時歎乃。

樂座合唱

みやれ里島よーう、雲に浮かぶよーう、
浮ぶ雲にはよーう、橋がないよーう。

倒れむとするを岩に支へて伏す。樂の音は絶えなむとして縷の如くつゞく。この時下手より年若き旅僧妙海顯はれいづ。

妙海獨唱

遠島出でゝ行脚の身、
昨宵の嵐に吹き逐はれ、
遙か遠江に流れしが、
ふと山路を跋み迷ひ、
此處には出でつ、足は蹇へ、

薄暮はちかし、いかで君、
一夜の旅寢ゆるされよ。

樂座合唱

みれば磯邊に生れしより、
かゝる麗人見も知らじ、
怡悅に溶く胸の火は、
虛空の星と流れつゝ、
二つの靈の白露寄りて、
彩も淨らの花はひらくよ。

花江獨唱

小濱の破壞の宿なれど、

休らひたまへ。

妙海獨唱

心ゆくかなこの濱屋、
いともうれしき。
にてつく〳〵互に見交はし幼き折の友と氣付く。

花江獨唱

君こそはおゝ。

妙海獨唱

おゝ君こそは。
と手をとりて追想無限。

妙海、花江聯唱

過ぎし故園の宵の春、

葉越の窓に歌を呼び、
露臺に語りし君こそは。

花江獨唱

おもはぬ因緣なになくも。
長くこの家に居たまはゞ。

樂座合唱

美くしき夢！
とうまき器樂に伴ひて天來の聲。

妙海獨唱

げに奇しき邂逅、
言の葉も出でしな。

樂座合唱

美くしき夢！
と前よりも強き聲樂。

妙海、花江聯唱

幸多き一人かな。
これより輕快の調につれて兩人亂舞す。

樂座合唱

うつゝなの踴躍や、
花に吸ふ蜜蜂の香か、
天馳ける鳥の音か、
砂白き浦の邊に、
うまし世の春は滿つ、
げに春のうつくしや、

げに夢ぞうつくしき。

この時鐘の音やゝつよく響く。一聲二聲、妙海は共に舞ひつゝも漸く耳欹てゝ舞踏の手をゆるむ。折しも亦かすかに。

樂座合唱

美くしき夢もあゝ。

忽ちいたくも強く又鐘の音鳴りわたる、餘音嫋々、妙海急に舞の手を止め、概然として次の獨唱にうつる。伴奏の器樂は崇嚴なる聖樂調。

妙海獨唱

あれこそ寺院の鐘の建立？

南無大菩薩、

美くしき夢あなあさまし、

われは沙門修業の身。

樂座合唱

むかしの夢は空寂の、

鐘に破れぬ、

一念精進の歸依の身の、

何をわづらふ。

花江獨唱

何とや、君は狂ひましゝか。

またかすかに鐘の音ひゞく。

妙海獨唱

過ぎしは夢よ、いま捨離の身の、

君と會はむも今日を限り。
と妙海の去り行かむとするに。

花江獨唱

情なき君よ、ゆきまさば、
愁憂の囚人、身ぞかなしき、
靈の空虛よ。
歌は漸くとぎれ〳〵になり遂に倒る。

妙海獨唱

惡しうな思ひたまひそ、さらば。
さらば。
と足おもたげに崖道へかゝり振返る時忽ち泡立
だしく花江起て跡追はむとす、刹那妙海の姿消ゆ。

花江獨唱

美くしき夢、春や何處に。
と歌ふ時落花又一しきり鐘また響く。悲痛なる合
唱につれて狂亂めいたる振事あり。

樂座合唱

紅の花靑醒めぬ。
わかき枝の潰折れぬ。
うつろ、〳〵、身もうつろ、
うつろ、〳〵世もうつろ、
空虛の夢の穩樓は、
鐘の響音！
合唱中舞臺は漸く暗くなり花江は舞臺を廻り上
手妙海のあと追ふ見えにて幕。

下の幕　鐘塔の魔

樹深き山奥の夜に相應しき物すごき序樂の調にて幕あがる。舞臺は凡て嵯峨たる山の頂、寺院境内のさま、大樹此處彼處に、遠く深林の裡、大伽藍を畫ける背景には朧月浮べり。上手一段高き處には鐘塔、塔をめぐりて山寺の僧二人いましがた釣りし新鐘を撞き了れる體。

樂座合唱

山寺の春の夕ぐれ、
來て見れば、
入相の鐘に花ぞ散る、花ぞちりける。

寺僧甲獨唱

新らしき鐘の音の、
晩春の風情かな。

寺僧乙獨唱

誰が法、心こめて鑄し、
身も靈も消ゆる音よ。

寺僧甲獨唱

遠鳴りの崇かき音は、
いづくまでひゞくらむ。

寺僧乙獨唱

聞く人は寂の音に、
うたれつゝなにおもふ。

寺僧甲乙聯唱

さてしもふかき意味の音よ。

樂座合唱（寺僧も共に歌ふ）

初夜の鐘をつくときは、
諸行無常と響くなり、
後夜の聲は是生滅法、
晨朝の音は生滅々已、
入相こそは寂滅爲樂。

此合唱終らむとする時主僧あらはる。

主僧獨唱

新鐘あげし法悅に、
いまいたさばや鐘供養、

なにかの用意とゝのへよ。

寺僧承つて行かむとする刹那泡立だしく呼吸せき切つて前幕の妙海走り來る。

寺僧甲獨唱

何處の御方、

寺僧乙獨唱

何用ありて、

寺僧甲乙聯唱

參られしか。

妙海獨唱

されば、彼方の濱にゆきくれ、
憩ひし浦屋のわかき女は、

往昔故郷に稚兒の友、
驚き喜びわれを止め、
はからず夢路たどりしが、

樂座男聲二部合唱

折から鐘の音……

樂座女聲二部合唱

想へば法の身……

妙海獨唱

かくてはならじと此處まで來しが、
彼女また跡を追ひて後方に……
隱まひてたべ、暫しがほど。

主僧寺僧甲乙三部合唱

よくぞ法心。
とあたりを見廻すうちに花江の妖聲舞臺のうしろにて。

花江獨唱

美くしき夢ー

妙海獨唱

はやもあれに、隱樓は？

主僧獨唱

さらば鐘樓に。
にて寺僧を伴ひ鐘を下してその中に妙海を入れしむ、處へ花江物狂はしく出で來り。

花江獨唱
古るき友よ、いづこへ、
春やいづくに。

樂座合唱
美くしき夢いづこ。

花江獨唱
友はいづこぞ。

寺僧甲獨唱
さる方は、

寺僧乙獨唱
よも知らず。

主僧獨唱

春の夜の露もふかし。

寺僧乙獨唱
とく〳〵磯へ、

寺僧甲獨唱
歸られよ。

花江悄然として邊を見廻はし。

花江獨唱
美くしき……夢。
と悲哀なる高音に拍子とり足を土にはたく如く歩みて退場。乃ち寺僧は鐘を退けむとす。その物音山彦に響いて、器樂は風荒まじき亂調に噪音を混へて鳴る。花江再び髪振亂し形相變へて走り歸る。

花江獨唱

怪しき鐘よ、魔のうたよ。

と鐘樓へ近づく、この時前幕の父磯秋あらはる。

磯秋獨唱

おゝそなたは吾子か、吾子なるか。

樂座合唱

怪しき鐘よ、魔のうたよ。

花江は父の來るや鐘のうちに入る、僧達何れも驚愕の體ばら〳〵と鐘樓より間遠に啞然として立つ、主僧祈禱す。

主僧獨唱

南無大菩薩！

磯秋獨唱

おゝわが愛兒よ。

樂座合唱（寺僧も共に唱ふ）

南無大菩薩！

淨土の帷かゝげて、今そ慈眼に、

二つの靈を垂救あれ、

南無大菩薩！

合唱終らむとする時、鐘は自づと釣上るや花江は魔鬼の相をなし父をうち振り妙海を掴みて立つ。

大風また起る。

磯秋獨唱

おゝわが愛兒や。

磯秋絶叫して鐘楼の方を見つめつゝ失神す。嵐益々烈し。僧達は一心に祈る。

寺僧甲獨唱

東方に降三世明王。

寺僧乙獨唱

南方に軍荼使夜叉明王。

寺僧甲獨唱

西方に大威德明王。

寺僧乙獨唱

北方に金剛夜叉明王。

主僧獨唱

中央に大日大聖不動。

樂座合唱

曩謨三曼多轉日羅南、
旋多摩訶嚕遮那、
娑婆多耶吽多羅叱于翰、
聽我說者得大智惠、
智我身者即身成佛。

管絃樂の調は聲をかぎりの此合唱をうち消さむまでに高響き樹木は嵐の如く動き木の葉散亂、豪壯の風趣を盡す中に、魔女花江は青醒めたる妙海を掴み、共に昇天の見えよろしく幕。（終）

菅絃

をはり

明治四十年四月五日印刷
明治四十年四月八日發行

正價金五拾錢

著作者　小林愛雄
東京市神田區表神保町貳番地

發行者　岡三郎
東京市京橋區日吉町十番地

印刷者　中村彌助
東京市京橋區日吉町十番地

印刷所　近藤商店活版部

不許複製

發行所
東京市神田區表神保町貳番地
振替口座四一〇五番
彩雲閣
電話本局一六一八番